

腐敗の証



エピローグ

「来るな！来ないでくれ！それ以上近づいたら撃つぞ！」

追い詰められ、崖を背にし、俺は使い慣れない拳銃を構えていた。

愛すべき人に銃口を向けるということの意味も知らずに・・・。

彼女が一步こちらへと歩み寄った。

「くるなああっ！！」

叫び声と同時に引き金を引く、銃声はやたら軽く、パンという音を立てただけだった。

その反動で後ろにのけぞり、数歩下がったところで足場がなくなる。

朝日が反射して、赤い真珠のような液体がキラキラと輝いているのだけが見えた。

俺は銃口の先で、空が遠くなっていくのを見つめていた。

なぜこうなった？これが俺の人生の結末なのか？

俺はカーテンコールもないままに幕が降りてくるのを感じていた。

逃げ出して

どれくらいたったのだろう。

草むらで息を潜めて、俺たちはじっと目をこらし、耳をすましていた。

夜。月のない夜。

何ヶ月も前から、この日を待っていた。

俺と親友であるタチリの二人で考えた計画だ。

うまくいく。その確信はあった。

その証拠にまだ誰も追ってこない。

サーチライトが通り過ぎ、待ちに待った瞬間が来た。

打ち合わせどおり、俺たちは同時に外の世界に向かった。

自由な世界。自分で生きる世界。

もうすぐだ、もうすぐ手に入る。自分の本。自分の服。自分の家。

警備員たちの目をかいくぐり、タチリが先に外に出た。

続いて、俺も外の世界へと飛び込む。

出た！！

俺の顔は無意識のうちにほころんでいた。

タチリが真剣な顔で待ち受けていなければ、叫んでいたに違いなかった。

タチリは顎で森の方を指し、俺に先に行くよう促した。

俺は頷いて、足音をたてないようにしながら森の中に入っていった。

後ろから、タチリがついてくる。背後を確認して頷くところで始めて、ニヤリと笑った。

暗くてよく見えなかったが、気配で笑ったことを察していた。

「やったな、キヒト。このまま十分歩けば小さな道に出る、オレたちの自由はすぐそこだ。」

タチリが聞こえるか聞こえないかぐらいの声で言った。

俺は無言で頷くと、タチリと同じようにニヤリと笑った。

俺たちは小さな道を目指して歩いた。その道が何処に続いているのかは知らない。

でも、少なくとも今まで俺たちがいた所よりはいい。

道はどこかに続いているものだ。行き止まりもあるかも知れないが、必ずどこかには続いている

。

俺たちはその道を歩いていける。それが重要なことだった。

「なあ、キヒト。まず、何がしたい？」

タチリの質問に俺は考え込んだ。何がしたいだろう？

どんなことが出来るのだろうか。走る。歩く。跳ぶ。遊ぶ。笑う。

笑う。声を出して笑う。大声で笑う。

「腹の底から笑う。」

俺の答えにタチリはブツとふきだした。

「おいおい・・・、もっとデカイ事やろうぜ。」

「じゃあお前は何したいんだよ。」

ムツとした俺に、タチリは満面の笑みを浮かべてこう言った。

「店を出そう。争いに巻き込まれない平和な場所で、店を開きたい。キヒトも一緒にやらないか？」

「店か・・・何を売るのさ。」

「何でもいい。誰かが喜んでくれるものなら何でもいい。」

タチリは目を輝かせていた。暗いはずの森のなかで、タチリの瞳がなぜか輝いていた。

「タチリは手先が器用だもんな。何か作るといいよ。」

「そうか・・・それもいいな。」

森の木がまばらになってきた。

明かりが見える。外灯の明かりだ。

俺たちは同時に光の中に飛びこんだ。道だ。道に出たんだ。

外灯の下で、俺とタチリは立ち尽くしていた。左右に細い道が続いている。

しばし見詰め合い、俺はタチリの口の端がゆるんでいることに気づいた。

「ふっ・・・」

「はっ・・・」

同時に短く息を漏らす。

「・・・ふふ・・・ははは・・・」

「はは・・・ふは・・・」

俺たちは小さく笑い始めた。

「ははは・・・はっはっはっはっ！」

「あははは・・・あっはっはっ・・・はは！」

自然と声が大きくなっていき、俺たちは夜の闇を吹き飛ばすぐらい大声で笑っていた。

腹の底から笑っていた。止まらなかった。笑いが止まらなかった。

自由だ。あれほど渴望していた自由が今ここにある。大声で笑っても怒られない。処罰もない。

あの施設にいた者の中で俺とタチリだけが、自由を手に入れることが出来たのだ。

誰にも束縛されない。命令に従う必要もない。無理に苦しい思いをさせられることもない。

戦うことも争うこともない。

ここにいるのは俺とタチリだけだ。

「ははっ！・・・はあ・・・はあ・・・」

タチリの方が先に笑いやんだ。

「これで、お前のしたいことはひとつ出来たな。」

「ははは！っは・・・は・・・はあ。・・・ああ。」

俺もやっと落ち着いてきて、呼吸を整える。

大声で笑うことがこんなに気持ちいいことだったとは知らなかった。

タチリは左右の道を見た。

一方は上り坂。もう一方は平坦な道。

「どっちに行くキヒト？オレたち選べるんだぜ。」

「この坂を越えたら何処につくんだろう？」

俺は坂の向こうが知りたかった。この坂を越えると何が待っているのだろうか？

「よし、行こう。オレたちはこの坂道を登ってみよう。この先にはきっと何かある。」

タチリの言葉に頷いて、俺たち二人は坂を上り始めた。

どんなに急な坂でも、俺たち二人なら上っていける。

その坂の一番上までついたとき、朝日が俺たちの背中を押すかのように昇ってきた。

俺たちがこれから行く下り坂に俺たち二人分の長い影が伸びていた。

眼下に小さな集落が見えた。村だ。

俺たちは何も言わずに村へと歩いていった。

すばらしい人生が目の前に広がっている。

そのときの俺は完全に舞い上がっていて、俺たちの人生が幸せになると信じていた。

根拠のない確信だった。だが、そのときはそれだけで幸せだった。

しばらく歩いていくうちに、辺りはだんだん明るくなり、気温も徐々に上がってきた。村まで、もうあと数十歩というところで俺は横を歩いていたはずのタチリがいないことに気がついた。

まさか、追っ手が来たのか？いや、それなら俺もとっくにつかまっているはずだ。タチリだって声をあげないわけがない。

焦って後ろを振り返り、数メートル後ろにタチリを見つけてほっとする。

「どうしたんだよ・・・ッ？タチリ？！」

俺の目の前でよろけて地面に膝を着き、タチリはしゃがみ込んだ。

慌てて駆け寄ると、今まで歩いてきた道に血がぼたぼたと落ちている。

「怪我、してるのか？！」

「逃げるときに・・・ちょっと、かすった。大丈夫。たいした事・・・ない。歩けるよ。」

左足を抑えるタチリの指の間から赤黒い液体とゲル状のものが見えた。

タチリは立とうとして、苦痛に顔をゆがませた。

呼吸も荒い。

俺はタチリの額に手を当てた。

「細菌が入ったんだ。熱がある。・・・無理しちゃダメだ！俺が村まで運ぶよ。」

「肩を貸してくれば、歩ける。少し休めるところを探そう。」

「病院にいかないと・・・」

言いかけて俺はタチリにキッと睨みつけられた。

この顔は苦手だ。

「病院は、ダメだ。オレたちには身分証明がない。怪しまれて、警察に連絡されたらどうする？」

「あ・・・。」

「もう、あそこには戻りたくないだろ？」

タチリの言葉に俺は頷くしかなかった。あそこには、戻りたくない。

「それに、たぶん連れ戻されるだけじゃすまない。」

そうだ、あいつらにとって、俺達は実験動物でしかない。

「オレ達は自由を手に入れたんだ。生きなきゃ意味がない。」

生きなきゃ意味がない。

俺はタチリの言葉を反すうして、タチリの腕を自分の肩に回した。

「とりあえず、休んで治療できる場所を探そう。」

俺は、そう言って集落へと歩き出した。

「そうしよう。・・・悪いな、キヒト。」

「そういうこと言うなよ。二人で生きてこうって脱走する前に決めたら。」

「ああ・・・そうだったな。」

俺達は二人で歩いていた。

タチリは左足を引きずりながら、右足で強く地面を踏みしめていた。

俺はタチリを支えながらゆっくりと村に入っていった。

村は、がらんとしていた。時間が早いせいかもしれない。

だが、俺達にとっては好都合だった。あまり人がいると、この怪我は騒ぎになるかもしれない。

そうすると、病院か、警察に行くはめになっていた可能性もある。

それは危険だった。

ふと、その時だった。一人の少女が家から出てきたのだ。

少女といっても、俺達と同じぐらいで、たぶん15, 6といったところだろう。

彼女の長い髪は朝日を反射して絹のようにきらめき、滑らかに風に揺れていた。

花の香りがした。

彼女は俺の方をに歩きかけて、そこでやっと俺に気づいた。

いや、違う。俺の担いでいるタチリの傷に気づいた。

ヒッ、と声を上げそうになって、彼女は家に逃げ帰ろうとした。

「待って！」

俺は咄嗟に彼女を呼び止めた。

「休める場所を探してるんです！少しだけでいいから休ませてもらえませんか？あ・・・きれいな水を少しくれるだけでもいい。この傷を、治療したいんです。傷口を洗って、止血ぐらいはしたい。消毒薬があればもっといいけど・・・。」

彼女は家に入りかけた所で足を止め、ゆっくりと振り返った。

「・・・母さんに、聞いてみます。」

言って、彼女は家に入って行った。

俺は家の前まで行って、花の香りの原因を知った。

そこは花屋だった。少しあいた扉から黄色い花が見えた。

花なんて見たのは何年ぶりだろう。あそこには白い土と灰色のコンクリートしかなかった。

枯れ草を見ることはあったが、それなのに何故か生きた雑草すらなかった。

生きているのは人間だけだった。完璧なまでに清潔にされていたため、鼠もゴキブリも、ノミやシラミさえもいなかった。生きているのは子どもだけだった。統制と管理している研究員だか、軍人だかは皆魚が死んだような目をしていた。

子どもの中にさえも統制と管理下に組み込まれ、完全な部品になってしまっているものがいた。

ここは、違うんだ。花がある。花が生きている。土が生きている。家も生きている。村が生きている。

この村は、まだ眠っているのであって死んでいるのではない。

あと、数時間もすると目を覚ます。

「タチリ・・・生きてる。ここは生きてる。すごいよ・・・。」

俺はぼんやりと花屋を眺めていた。無論彼女が出てくるのを待っていたのだが、それ以上にいろんなものが生きているという現実にとだ茫然としていた。当たり前だったことなのだが、この数年が完全に俺達を外界から隔離していた。

「タチリ・・・？」

タチリが何も言わないので不思議に思い、タチリの顔を見る。

「！！」

タチリは汗の浮かんだ顔をゆがませ、歯を食いしばっていた。

「あの・・・。」

彼女が家から出てきていた。何か言いかけて、彼女もタチリの様子に驚いたようだった。

「早く中へ。」

彼女の澄んだ瞳が俺の目を見ていた。

俺は頷いてタチリを担いで家の中へとできるだけ足を早めた。

店の奥に行き、居間のソファにタチリを寝かせると俺はそのまま床に座り込んだ。

その間に、彼女は水と救急箱を持ってくる。

まず、水で傷口を洗い、救急箱から消毒薬を出す。

手際よく治療を済ませると、彼女はタチリの額に手を当てそれから解熱剤を飲ませた。

タチリは意識がはっきりしないのか、ただ声を出すのが苦痛なのか小さな声で何か言ったようだったが俺には聞こえなかった。

しばらくするとタチリの呼吸が整ってきた。彼女が奥の部屋から毛布を持ってきてタチリにかけてやる。

「あの・・・ありがとう。」

「・・・この人が元気になったら、出て行ってくださいよ。」

俺の何年ぶりかわからない「ありがとう」に彼女は少し伏目がちな表情で冷たく返した。

そして、立ち上がり部屋を去ろうとした。俺は立ち上がり慌てて言った。

「あ・・・えと、俺はキヒト。こいつはタチリ。・・・君は？」

彼女は振り向かなかった。開けたドアの向こうを見たまま少し間を空けて、それから短く答えた。

「・・・ミル」

言い放って、そのまま足早に部屋を出て行く。

「・・・ミル・・・か。」

聞きなれない響きだ。しかし何故か心地よい。まだ、何も彼女について知らないのに彼女らしい名前だと思った。

何かが俺の中で変わりつつあった。

タチリは眠っていた。長くても、明日には出て行くことになるだろう。

タチリが重症でない限り。

そう長くはられない。

俺はタチリの眠るその横に座り、ミルが出て行ったドアを眺めていた。

俺は空腹で目を覚ました。

いつの間にか眠っていたらしい。

一瞬、記憶が混乱する。ここは何処だ？俺は何故ここにいる？

部屋を見回して、やっと昨日のことを思い出す。

あの施設から逃げ出し、ずっと道を歩いていた。思い出していくうちに気分が高まっていく。

そうだ！俺達はあの施設から開放されたんだ。自由を手に入れたんだ。坂を上って、この集落に来ることを自分で決めて、そして・・・。

思考が止まり、はっとする。

「タチリ！」

タチリの眠っていた方を見るとタチリは先に目を覚ましていたらしく、上半身をソファの上を起こしてぼんやりと窓から外を眺めていた。

「・・・ここは？」

外を眺めたまま、タチリは俺に聞いてきた。

「・・・村に入って・・・どうなったんだ？オレは足が痛んで、だんだん気が遠くなっていて・・・」

「ミルっていう女の子が助けてくれたんだ。家に入れてもらってソファを貸してもらって怪我の治療をしてくれた。ここはその女の子の家の中だよ。」

俺の答えを聞いて、タチリは何かを思い出そうとしているようだった。

「そうだ・・・女の子だ。・・・あれは、夢じゃなかったのか。」

「大丈夫か？」

タチリの様子が変なので俺はなんだか不安になってきた。

「大丈夫だ。ただ、ちょっと記憶が曖昧で・・・」

そのときだった。俺とタチリの腹の音が同時になった。

俺たちは顔を見合わせた。

「・・・そういえば、昨日の晩から何も食べてないな。食料はあそこからは持ち出せなかったし。」

タチリが深刻な顔をしてうつむく。確かに、あの施設の中では自分の物なんてなかった。配られる食料を保存の利くものだけでも持ってきたかったが、それすら許されなかった。もちろん金銭などもっていない。

「これから、どうやって生活しようか・・・」

俺もうつむぎ、自分達の無鉄砲さに失望する。

「働くしかないだろう。金がなきゃ生活できない。」

どこで？と、問おうとして俺はある提案を思いついた。

「ここで働こう！ここは花屋なんだ。もしかしたら働かさせてくれるかもしれない。」

俺の提案にタチリは眉をよせた。

「・・・なあ、キヒト。」

タチリが何か言いかけたときに、ドアが開いた。

振り向くとそこには女の子の人が立っていた。手にはパンとミルクの乗ったお盆をもっていた。

おそらくミルの母親だろう。

「さあ、お腹がすいたでしょう？たいした物はないけど、よかったら食べて。」

近くの机の上にお盆をおく。

「ありがとうございます。」

俺たちがお礼を言うと、彼女は小さく笑って「どういたしまして」と言った。

俺には温かいその顔がひどくやつれて見えた。

見たところ腕はやせ細っているわけではないのがなんとなく奇妙だ。

「朝はごめんなさいね。手が離せなくて・・・怪我が治るまでゆっくりしてって。」

俺はミルとこの母親の態度の違いに驚いた。

「あの・・・本当にいいんですか？」

俺の不安そうな顔を見て、母親は何か思い当たる節があったようだった。

「・・・・・・・・もしかして、娘が何か言いましたか？」

「・・・・・・・・いえ。そういう訳では・・・・・・・・」

聞いてはいけないことだったのかと思い、俺は慌てて否定した。

「いいんです。先週、夫が亡くなりまして・・・・・・・・あの子にとっては父な訳ですけど・・・・・・・・。それで少し・・・・・・・・すみませんね。ミルが何を言ったかはわかりませんが気にしないで下さい、元気になるまでここにいていいですから。」

「あ・・・・・・・・はい。」

それで、この人は疲れた顔をしていたのか・・・・・・・・。なんとなく気まずい空気が流れる。

「あ！そうだね。さっき何か話していたでしょう？聞くつもりはなかったんだけど聞こえてしまって・・・・・・・・。怪我をしているあなたは無理だけど、よかったら君、ここで働いてくれないかしら？夫のやっていた力仕事はね、私にはちょっと辛くて・・・・・・・・お給料も少しなら出せるわ。本当に少しだけど、それでよかったらここで働いてくれないかしら。」

「本当ですか？！ありがとうございます！」

「ええ、じゃあお願いするわね。」

俺は願ってもない申し出に有頂天になっていた。

「俺は・・・・・・・・あ、僕はキヒト。こっちはタチリ。よろしくお願いします！」

「私はマリー・ハフマン。しばらくの間よろしくね。」

ハフマンさんの笑顔に少しだけ活気が出てきたように見えた。

「仕事の説明は今晚するわね。今日はしっかり食べて、ゆっくり休みなさい。それじゃあ、また夕食のときにね。」

ハフマンさんはそう言って部屋を出て行った。

「いい人でよかったね。これでしばらくは何とかなりそうだ。」

俺は順調にことが進んで上機嫌だったが、タチリは渋い顔をしていた。

「ああ。でも、キヒト。ここには、そう長くはいないんだぞ。」

「わかってるよ。タチリの足が治って、ある程度お金がたまったら出て行くんだろ？」

「・・・・・・・・わかってるなら、いいんだ。」

タチリは下を向いて何か悩んでいるようだった。

「どうかしたの？」

「・・・・・・・・いや。なんでもない。」

答えたあと少し考え込んで、そのあと急に顔を上げて笑顔を見せる。

「さあ！食べようか。せっかく持ってきてもらったんだし。」

タチリの取り繕ったような笑顔が心に引っかかった。

だが、そのときはお腹も減っていたのでタチリの言うように昼食をとることにした。

夕食は昼と同じく、部屋にハフマンさんが届けてくれた。

俺はできるだけタチリの傍にいてやりたかったのと、あまりうろちょろするのもどうかと思い、トイレに行く以外はずっとその部屋にいた。

ミルは俺達のことを、どうも良く思っていないらしく、その日は一度も部屋にこなかった。

夕食のあと、明日からの仕事の内容を聞き、タチリの包帯を替えてその日はそのまま眠りについた。

次の日の早朝から俺の仕事ははじまった。

主に重いものを運ぶのが俺の仕事だ。土とか、大きな植木鉢とか。

肥料をまぜたり、植物の世話をするのはハフマンさんの仕事だ。

土をハフマンさんの所に運んだ後、しばらく俺はハフマンさんの仕事の様子を見ている。

花はこうやって育つのかと感心して見ていると、ハフマンさんが「何か育ててみる？」と聞いてきた。

俺は、枯らしてしまいそうだから「いいです。」と首を横に振った。

うまく育てられるなら、ひとつくらい花を育ててみたかったけどその自信はなかった。

何がおかしいのか、ハフマンさんは「そう。」と言って小さく微笑んだ。

ミルは店内の掃除をして、花をきれいに飾っている。

少しだけこちらを見たような気がしたが、気のせいだったらしい。

彼女は相変わらず、俺やタチリとは口を利こうとしなかった。

昼にタチリとご飯を食べようと思って、タチリの寝ている部屋の戸を開けた瞬間、俺は啞然とした。

「もう昼食の時間か。どうした？キヒト。」

タチリは立って歩いていた。

「治ったのか?!」

俺が驚いて言うと、タチリは肩をすくめた。

「もともと、そこまで酷い傷じゃないからな。熱も引いたし、歩くことはできる。走るのはちょっと無理だが・・・。」

そこまで言って、痛みで顔をゆがめソファに座りこむ。

「・・・・・・・・長時間歩くのも無理らしいな。」

タチリが深いため息をつくのを俺はじっと見ていた。

俺はなんとなくホッとした。治るのに、しばらくはかかりそうだ。

？

「足に負担のかからない仕事ならオレも出来るかと思ったんだが。」

「無理しない方がいい。食べようか。」

難しい顔をするタチリに俺は食事を促し、もらった昼食を差し出した。

タチリは手を出さなかった。

「でも、こうやって食べてばかりじゃ悪い。フェアじゃない。」

俺はサンドイッチを一切れ食べた。

「じゃあ、治ってから働いて返せばいい事だろ。今は治す事を考えよう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

タチリの顔が一瞬曇ったように見えた。

少し間があってから、タチリはようやく昼食に手を伸ばした。

納得したわけではないだろうが、少なくとも今日明日は治すことに専念してくれるだろう。

なんとなく気まずい雰囲気になり、俺はしゃべりにくくなってしまった。

仕方がないので会話をあきらめ、ふとミルのことを思う。

父親の死。

俺にとっては遙か昔のことだ。

まだ、死を理解する前のことだった。

気づいたら、あの施設にいた。

タチリに至っては父がいた記憶すらない。

きっと俺達に彼女の心情を理解することなんか出来ない。

悲しみも、苦しきも。

でも、もしかしたら・・・・・・・・気を紛らわすくらいは出来るんじゃないだろうか。

彼女の笑顔を見てみたいと思った。

同じような日が2日続いた。

タチリはすまなそうな顔で食事をし、ときどき歩いて様子を見ているようだった。

ハフマンさんは微笑むこともあったが、ミルは顔すら見せようとしなかった。

タチリが仕事を始めたのは俺が仕事を始めて4日目のことだった。

割と歩ける程度に回復したので掃除を任された。

その日は、初めて4人で食事をした。

ミルは前ほど嫌そうな顔はしていなかった。

驚いたことには、食事が終わりハフマンさんが片づけをしているときに、そっと俺達に話しかけてきた。

「母さんが笑うようになったのは、あなた達が来てからよ。ありがとう。」

彼女自身は笑っていなかったが、その言葉と声は俺の耳に、いや脳に刻印のように焼け付いて離れなかった。

ありがとう。

この響きの中にあるものは何だろう？

ありがとう。

何度も頭の中で繰り返す。

ありがとう。

ああ。そうだ。

俺は彼女に会ってから、彼女の事ばかり考えている。

彼女の笑顔を見たいと思っている。

これらが意味するところは何か。俺は知っている。

たぶんこれが恋ってものなんだ。

タチリに言ったらどう思うだろう？

きっと信じない。

そう思ったら何故かひとりでに笑いがこみ上げてきた。

寝る前に、笑いをこらえる俺を見てタチリは不思議そうな顔をした。

「何かあったのか？」

俺は首を横に振って否定した。

「何にも。」

タチリは首をかしげて「おやすみ」と言った。

俺も「おやすみ」と言って、布団に入った。

その日はなかなか寝付けなかった。

聞こえて

その日から、ミルは俺達とも普通に話すようになった。

しかし、俺がミルの笑うところを見ることはなかった。

なんてことのない日が一週間続いたある日のことだった。

いつものように、俺は土や植木鉢を運び終えてハフマンさんの仕事を少し手伝い、店内にいるミルとタチリと話でもしようと思っていた。

ドアに手をかけた時のことだった。

女の人の笑い声が聞こえた。

「タチリって面白いのね。」

俺は何故かドアを開けることが出来なかった。

くすくすと笑うその人の声は間違いなくミルのものだ。

「どこが面白いんだ？」

少し困ったようなタチリの声。

二人はそのあともなにか楽しそうに談笑していたが、その内容は俺の頭には全く残らなかった。

「あ、オレ水換えてくる。」

バケツを持ち上げ歩いてくる音が耳に入ってくる。

俺はようやく我に返った。

急にとてつもなく悪いことをしてしまったような気になって、俺はそこから逃げなければならぬと思った。

その場を離れようとしたその瞬間。ドアが開いた。

「あ」

タチリがバケツを持って立っている。

「どうした？キヒト。もう、仕事終わったのか？」

「え・・・あ、うん。」

俺はとりあえず頷いて、タチリには気づかれぬように横目でミルを見た。

視界の端に捉えたミルの顔は、笑ってはいなかった。

「こっちも、もうちょっとしたら終わるから。オレ、水換えてくるな。」

タチリはそう言って、水場へ歩いていった。

ミルは何も言わずにモップで床を拭いていた。

なんだか嫌な感じがする。

自分の中でもやもやしている何かを振り払おうと、首を振って俺はタチリが最初に運ばれた部屋に向かった。

タチリはミルと何を話していたのだろう。

それが妙に気になった。

ミルの小さな笑い声が頭の中をこだまする。

左から聞こえたと思ったら右から聞こえ、近くで聞こえたと思ったら遠くから聞こえる。

腹の中でぐるぐると汚いものが渦巻いている気がした。

この感情はなんだろう。知らない。知らない感情だ。

気持ち悪い。

「どうしたんだ？」

後ろからタチリの声が出た。

「・・・・・・・・なんでもない。」

タチリと顔を合わせたくなかった。話なんて出来ない。

こんなこと思ったことはなかったのに、今は別の部屋が欲しいと思った。

タチリが邪魔なんて、そんなこと今まで一度もなかったのに。何故か今はそう思っている。

俺の意思に反してタチリは俺の横に座った。

「あの子、変な子だな。」

あの子っていうのはミルのことだろう。変だろうか？俺はそうは思わない。

タチリがミルの話をするとイライラする。

「オレって面白いか？そんなことないよな？」

「さあ。」

不安になる。

「それにしても、こけたぐらいであんなに笑うことないのに。」

タチリは少し怒ったように言った。

ミルは俺には笑ってくれないよ。

「やっぱり、まだ足がなまってるのかな。」

「タチリ。」

俺は決心した。聴いておかなければならない。

「タチリは・・・・・・・・ミルのことをどう思ってるんだ？」

タチリはしゃべるのをやめた。ついでに体も止まる。

俺がゆっくりタチリの方に顔を向けると、タチリは眉を寄せて不思議そうな顔をしていた。

「どうって・・・・・・・・だから、変な子だなんて・・・・・・・・どうしたんだよキヒト、なんかいつもと違うぞ。」

「そう・・・・・・・・」

俺は再び床に向き合った。

俺がいつもと違う？そうだ。確かに違う。

それはわかるが、何故なのかはわからなかった。

「・・・・・・・・悪いけど、一人にしてくれないか？」

俺の言葉に、タチリは一瞬戸惑ったらしく動かなかった。が、その後静かに部屋を出て行った。

俺は一体どうしなってしまったんだろう。

タチリにあんなことを言うなんて。

やめよう。もう、考えるのをやめよう。今日の俺はどうかしているんだ。

そうさ、たぶんそうだ。

一晩寝れば元に戻る。また、タチリと普通に顔を会わせて普通に話せるようになる。

きっとそうだ。

そうなんだ。

まだ、昼にもなっていないのに眠りたかった。

眠ってしまいたかった。

ハフマンさんの体調が悪くなっていることに俺は気づかなかった。
今日になって、急に寝込んでしまい朝食にも顔を出さなくなった。
心配したミルが朝食を持って母親の部屋に行ったのだが、追い返された。
俺はどうしていいのかわからなかったので、とりあえずいつも通り仕事をしていた。
タチリもいつものように掃除をしていた。
俺は仕事を終わらせるとまだ掃除をしているタチリの所へ行った。
昨日のことを思い出すと嫌な気分になった。
少しためらった後、ドアを開けると、そこにはタチリだけがいた。
俺は胸をなでおろす。

「なあ、タチリ。」

タチリはモップを手にしたまま黙って下を向いていた。

「タチリ？」

何か考え込んでいるらしく声をかけても反応しなかった。

俺は近づいて行って、肩を叩いた。

「なあってば！」

ここまでやって、タチリはやっと俺の存在に気がついた。

「あ……キヒト。どうしたんだ？」

「タチリこそどうしたんだよ。何度も声かけたのに、全然気づかないし。」

タチリはしばらく目を丸くして俺を見たあと小さく「ごめん」とつぶやいた。

どうやら本当に気づいていなかったらしい。

「ハフマンさん、大丈夫かな？」

タチリはビクリと体を震わせた。そして、ゆっくりと顔を上げ、俺の目を見つめた。

「キヒト……」

その顔は何だか悲痛だった。

俺はタチリの次の言葉を待った。

「……やっぱり、ここを」

タチリが何か言おうとした時だった。

ガシャン

遠くで何かが割れる音がした。

ハフマンさんが寝ている部屋だ。

「母さん、何があったの?!」

ミルの声。

「ダメよ！開けないで！！」

「でも！」

ミルとハフマンさんの口論する声が聞こえた。

タチリがモップを放ってハフマンさんの寝ている部屋へ早足で歩き出した。

「?!俺も行くよ！」

言って、俺もタチリについていく。タチリは何の反応もしなかった。

返事も、振り返りも、止まりもしなかった。

ハフマンさんの部屋の前にミルがいた。

ドアの前でおろおろしている。

「キヒト、ミルを別の部屋に連れて行ってくれ。出来るだけ、この部屋に近づかないように。」

タチリの顔は張り詰めた糸のようだった。変に刺激すると切れてしまいそうだ。

「……………うん。わかった。」

俺はどうしていいかわからずにいるミルの腕を引っ張って、無理やり別の部屋に連れていった。

タチリは何か知っている。

ハフマンさんが体調を崩し、誰も部屋に入れたがらない理由を何か知っている。

俺にわかったのはそれだけだった。

部屋の中で俺はミルと二人だった。当然だ。この家には俺とミルとハフマンさんとタチリしかいない。

ミルは今にも泣き出しそうだった。

「なんで?なんで母さんは私を部屋に入れてくれないの？」

ミルは相当困惑していた。

俺の腕をつかんで離そうとしなかった。

「病気ならちゃんと食べなきゃいけないし、必要ならお医者さんも呼ばなきゃいけないし、なんとか治さないといけないのよ。！」

「うん……………」

「父さんも死んで、それだけで大変なのに、今度は母さんも死んじゃったら私独りになるじゃない!なんで私を避けるの?私のこと嫌いになったの?私何か悪いことした?それなら謝るから私を独りにしないで！」

ミルには俺の言葉も声も届いていなかった。

つかむものなら何でも良かったのだろう。別に俺の腕でなくても。

ただ訳がわからなくなっている。思ったことを言葉にして大声で叫ぶことでミルは何とか自分を保とうとしているようだった。

パンッ

軽い音が響いた。

俺は凍りついた。

ミルは叫ぶのをやめた。
俺はこの音を知っている。

銃声だ。

ハフマンさんの部屋。
俺はミルを置いて走った。
誰が発砲した？考えられるのは2つ。
ハフマンさんか……タチリか。

勢い良くドアを開けると、そこにはタチリが立っていた。

奥のベッドにハフマンさんがいる。
ベッドの脇の花瓶の残骸が床に散乱していた。
タチリが振り返った。

「キヒトか。」

タチリの顔と服に血がついていた。

「今……銃声が……」

俺はおそるおそる声にだした。
ハフマンさんが力なくベッドに倒れる。
「ああ、俺が撃ったよ。」

タチリの右手には拳銃が握られていた。

その手をもうひとつの手が握っていたらしい、糸の切れた人形を思わせる腕がそばにあった。

「……え？」

ハフマンさんは動かなかった。
俺はそのとき一体どんな顔をしていたのだろうか。
きっと酷い顔をしていたに違いない。
でも、何故か冷静に何が起こったのか理解してしまった。

タチリがハフマンさんを撃ち殺した。

「訳はあとで説明する。とりあえず、ここの片づけをするからもうしばらくミルを見ていてくれ。」

タチリは淡々とそう告げると片づけを始めた。

俺はその場に立ち尽くしていた。

「キヒト。早くミルのところに行けよ。こんなところあの子が見たら大変なことになるぞ。」
背を向けたままのタチリ。

俺は返事もせずに部屋を飛び出した。

おかしいよ。そんなわけないよ。だって俺達はもうこんな世界から離れたところで生活しているはずなんだ。

人が殺されたり、人を殺したりなんてあるわけないんだ。

じゃあ、今起こったのはなんだ？なんなんだ？わからない。わからないよ。

タチリは人を殺したりしない。俺も人を殺したりしない。

それが出来ないからあそこから逃げてきたんだろ？そんなことしたくないからあそこから逃げてきたんだろ？

俺はミルのいる部屋に行った。

「何があったの？」

ミルはずいぶん落ち着いたようだった。

混乱している俺をミルは不思議そうに、そして不安げに見ていた。

「いや．．．．．なんでも．．．．．」

ミルが首をかしげる。

俺の中で黒い声が聞こえた。

俺はそれを抑えようとして必死にもがいていた。

ダメだ。言っちゃダメだ。今言っちゃダメだ。ここで言っちゃダメだ。違うんだ。それは違うんだ。

腹の中で反響し大きくなった黒い声は喉まで上がってきた。

言うべきじゃない。少なくともこんな言い方するべきじゃない。それは裏切りだ。それは俺の黒い願望だ。

黒い声が俺の口から漏れ出てきた。

「タチリがハフマンさんを撃ち殺した。」

「．．．．．え？」

眉をよせ、瞬きを数回繰り返すミル。口はぎこちなく笑っている。

「わからない」と「信じられない」と「冗談でしょ？」をごちゃ混ぜにしたような顔。

きっと、さっきの俺もこんな顔をしていたのだろう。

俺はそんなことを考えてミルを眺めたい。

別れて

銃声がしてから数時間が経った。

ミルは今、ハフマンさんの部屋で一人で泣いている。

俺があの手を言った直後は、やはり信じられなかったらしくミルはハフマンさんの部屋に行こうとした。

俺は引きとめようとしたが、それもあまり長くはもたなかった。

結局、10分ほどで俺が折れてしまい、ミルと一緒にハフマンさんの部屋に行くことになった。

タチリは部屋の血をふき取り終えたところだった。

タチリはミルの姿を見ると肩をおろし、首を横に振って大きなため息をついた。

ミルはタチリを押しつけてハフマンさんに駆け寄った。

続いて俺もハフマンさんの寝ているベッドに近づいた。

額に穴が開いていた。

ミルはしばらくハフマンさんに声をかけたりしていたが、やがてその声も小さくなり、泣き声に変わった。

タチリはそんなミルを背に黙って部屋を出て行った。

俺は部屋から漏れるミルの泣き声を悲痛な思いで聞いていた。

俺とタチリは、最初にミルに案内してもらいタチリを寝かせた部屋にいた。

俺はタチリに聞きたいことが山ほどあった。

だが、いつ、何から切り出していいものか迷っていた。

「なあ、キヒト。」

迷っているうちに、タチリが話しかけてきた。

「何？」

このときの俺はどんなにそっけなかつただろう。

タチリは少し間をおいてから話を続けた。

「・・・やっぱり、ここを出よう。」

俺は耳を疑った。そして、次の瞬間には叫んでいた。

「ここを出るだって?! 何言ってるんだよ! こっちは聞きたいことが山ほどあるし、なんでハフマンさんを撃ったのかわかんないし、俺達が出て行ったらミルは一人になるんだ!」

「独りの方がまだマシだろうよ。それに、母親を殺した奴を家においておきたくはないだろ。」
タチリは淡々としていた。

「なら、タチリだけ出て行けばいいだろ!」

反射的に叫んだあと、俺は後悔した。

タチリの表情に浮かんでいたのは驚きと憎しみと孤独感だった。

だが、ここまで来たらもう引くわけにはいかない。

「俺はミルを独りになんてできない。放っておけないんだ。」

俺はこのときにやっと気づいた。

俺がミルのことをどう思っていたのか、何故ミルとタチリが楽しそうにしゃべっていた時気持ち悪かったのか。

「俺はミルのことが好きなんだ！」

タチリは俺の言葉に顔をしかめただけで驚きはしなかった。

「知ってる。だから、ここを出ようと言っているんだ。お前のためにも、あの子のためにも。」

俺はタチリが何を言いたいのかわからなかった。

「何言ってるんだ？」

「オレ達は普通の人間とは違うんだ。一緒に暮らすなんて無理な話だったんだ。」

「？」

「オレがハフマンさんを殺した理由だって？殺してくれって言われたんだよ。」

タチリは俺の目をまっすぐにみつめて、しかし、俺の反応を待たずに話し続けた。

「ハフマンさんはおかしくなっていたんだ。」

俺はタチリが何を言っているのかわからなかった。

「何でもいい。手近にいるモノを殺したくてしかたなくなっていたのさ。」

「・・・なんで・・・」

「誰にだってあるだろ？目障りな蚊を叩きつぶしたくなるのが。それが大きくなっただけさ。」

俺は何も言えなくなった。タチリの目があまりに真剣だったからだろうか。それとも、あまりに話が突飛だったからだろうか。それはわからなかった。

タチリは決して叫んだり大きな声を出しているわけではなかった。

ただ、威圧感があった。

「そういう薬みたいなものなんだよ・・・・・・・・・・」

タチリはそこで一旦言葉を切った。いや、言葉に詰まった。

口を「お」の形に開けたまま数秒止まり、そのあとに初めて俺から目をそらした。

「・・・・・・・・オレ達・・・・が、あの施設で実験されていたのは、そういう薬みたいなものを人間から発することができるようにすることだったんだ。」

「なんで、そんなこと・・・・・・・・」

俺はやっとの思いで、その短い一言を吐いた。

タチリの肩が震えていた。

「・・・・・・・・オレ達・・・・をうまく敵軍に送りこめば勝手に同士討ちしてくれるだろ？お前は字が読めなかったから知らなかっただろうけど・・・・・・・・」

「じゃあ、なんで俺とタチリは大丈夫なんだよ。」

俺は自分の声が震えていることに気づいた。

「薬ってのは、長く使い続けると効かなくなるもんだろ。これでわかったか？オレ達はここにいちゃいけないんだ。」

タチリの言うことが嘘なのか本当なのか、俺にはわからなかった。

施設の中にいたときからずっと一緒にいた親友。一緒に脱走した。一緒に夢を語った。一緒に働いた。

信じられるはずだ。タチリはこんな嘘はつかない。

これは真実であるはずだ。

俺は確かにそう思っていた。

だが、その逆の考えも隅っこにあった。

タチリは俺を利用していただけなのではないか。

ハフマンさんを殺したのには全く違う理由があるのではないか。

本当は俺がミルを好きなことが気に食わないのではないか。

本当にタチリを信用していいのか。

「な、キヒト。一緒にここを出よう。」

タチリの声は優しくかった。懇願するようでもあった。

それが酷く卑しく聞こえた。

「嫌だ。」

俺は短く冷淡な言葉をタチリに投げつけた。

「俺はここに残る。出て行きたいなら独りで行けよ。」

これが決定打となったようだった。タチリの顔はみるみる鬼のようになっていった。

「ああ出て行くさ！勝手にさせてもらうよ。どうなっても知らないからな！」

タチリは急に叫んだ。耳が痛いほどだった。

踵を返し、部屋を出て行こうとする。

俺はそれを見ていた。

が、タチリはドアの前で立ち止まった。

「オレは明日の朝4時に出発する。・・・もし・・・もしも、気が変わったら・・・その時間に門の前で会おう。」

俺は何も答える気はなかった。

沈黙の後、タチリは「じゃあな」と言って部屋を出た行った。

さっきまで聞こえていなかった、ミルのすすり泣く声がまた聞こえてきた。

その日はもうタチリと会わなかった。

ミルの傍に行ったが、慰めるかたを知らない俺にはどうすることもできず、ただ泣いているミルを見ていることしかできなかった。

ただ、ミルを見ていて思ったのは、彼女を独りにはできないということと、やはりさっきの選択は間違っていなかったということだった。

夕方になり食事を勧めたが、ミルは首を横に振るばかりで何も口にせず泣いたり泣き止んだりを繰り返していた。

タチリはどこにいるのかわからなかったが、たまに気配を感じた。
とても長い一日だった。

次の日の朝。目が覚めると、もう6時だった。

ハフマンさんも死んで、仕事もどうしていいのかわからなかったから、なんとなく寝過ごしてしまっただけだった。

ミルは泣きつかれたのかまだ眠っているようだった。

タチリの荷物がなかった。

俺は家中を探したが、タチリはどこにもいなかった。

俺は門の外まで出て行った。朝日の下の道には人っ子一人いなかった。

タチリは、まるで初めから存在しなかったかのように跡形もなく消えてしまった。

追われて

タチリは何処にもいなかった。

ソファの上にあの拳銃が置いてあった。

何か、妙な不快感と不安感があった。

いや、俺は間違っただけなんじゃない。これで良かったんだ。

自分に言い聞かせて食卓へ向かう。

ミルがテーブルに突っ伏していた。テーブルの上にはパンが4つ用意されていた。

カップも4つあった。

「母さん」

ミルが突っ伏したまま発した声に俺はビクリとした。

「起きてこないね……」

続いたミルの言葉に、俺は全ての言葉を失った気がした。

「タチリも来ないね」

胃の入り口を締められたような気分になる。

ミルは顔を上げた。目は泣き腫らしたままで、髪が顔に張り付いていた。

「みんな、どこに行ったの？」

その視線の先には何もなかった。

誰に聞いたわけでもないのだろう。しかし、ミルは答えを待っていた。

俺にはそう見えた。

言おうか迷ったが、いずれわかることなのでタチリのは言うことにした。

「タチリは……出て行ったよ。今朝。」

「何で？」

ミルはすぐに聞いてきた。しかし、決して俺の方を見ようとはしなかった。

「ここにはいられないって言ってた。……ハフマンさんのこともあるし。」

「母さんがどうしたの？」

「……」

俺は答えられなかった。ミルはもしかしてハフマンさんが死んだことを受け入れられていないのだろうか。

「母さんが死んだこととタチリに何の関係があるの？」

「何の関係って……」

「母さんは自殺したのよ。理由はわからないけど。」

俺の言葉をさえぎってミルはハッキリとそう言った。

「え？」

「母さんは、自分で死にたくなくて死んだのよ。タチリとは関係ないわ。」

「だってタチリは自分がハフマンさんを殺したって……」

「そんなわけないじゃない。何言ってるの？」

「で、でも・・・」

「タチリには母さんを殺す理由がないもの。」

ミルがあまりに当然のように言うので、俺は段々自分の言っていたことに自信がなくなってきた。

「タチリは出て行く必要なんてないのよ。」

ミルは一体誰と話しているのだろう。不意にそれが気になった。

「なんで、あなたなの？」

ミルが顔をこちらに向けた。

「？」

俺にはミルが言いたいことがわからなかった。

「なんでタチリが出て行って、あなたがここに残っているの？」

「俺は・・・」

「私はタチリにいて欲しかったのよ！！」

ミルの声が部屋に響いた。

ミルは立ち上がり、俺を睨みつけていた。

わけがわからなかった。

ミルは震える手を後ろに伸ばし、その先のキッチンにおいてある包丁を手を取った。

俺は自分の足が自然と後ろに動いていくのに気づいた。

恐怖。確かに俺は恐怖を感じていた。

ミルは俺を睨みつけたまま、包丁を両手で構えた。

それが見えるか見えないかという頃には、俺はその部屋から逃げ出していた。

俺は何が何だかわからないまま、あのソファのある部屋に戻り、急いで必要なものをかき集め家を飛び出した。

店頭に並んでいるはずの花が皆引きちぎられ、床にぶちまけられていた。

ミルがやったのだろうか。何がミルを変えてしまったのだろうか。

母をなくしたショックだろうか。独りになったという孤独感だろうか。

それとも、タチリの言ったように俺達から発生しているという例の薬の影響なのだろうか。

俺は走った。頭の中をいろいろな考えがぐるぐる回っていた。

殺される。ミルに殺される。なんで？ミルは狂ってしまった。ミルも狂ってしまった。俺のせい

？逃げて、逃げなきゃ。殺される。怖い。ハフマンさん。花が。ぐちゃぐちゃに。ミルが。助けて。タチリ！怖い。殺される。

走っていくと海が見えた。

逃げ場がない！俺は振り返った。

ミルが包丁を持って、追ってきていた。

逃げないと・・・。

思って、再び前を向こうとしたときだった。

「あ！」

俺は自分の足につまづいて地面に叩きつけられた。

骨盤の右側が痛かった。何が硬いものがあたったらしい。

そうだ。俺はソファの上から・・・・・・・・。

ズボンの右ポケットからあの拳銃が出てきた。

俺は振り返りながら、上体をおこし、また走り始める。右手に拳銃を持って。

ミルは、もうそこまで来ていた。

距離を詰められたからか、走るのをやめ、じりじりと俺を追い詰めていく。

俺はもう崖まで来ていた。

観念してミルのほうに向き直る。

ミルの息が上がっているのは目に見えて明らかだった。

走って疲れているのもすぐにわかった。

だがしかし、その瞳の奥にある「怒り」らしい感情は衰えることはなく、包丁は相変わらず俺に向けられていた。

このままじゃ、殺される。

俺は死にたくなかった。

俺に残された選択肢はもうなかった。

死にたくなかったから、右手に持っていた拳銃を両手で構え・・・・・・・・震える銃口をミルに向けた。

再びエピローグ

「来るな！来ないでくれ！それ以上近づいたら撃つぞ！」
追い詰められ、崖を背にし、俺は使い慣れない拳銃を構えていた。
愛すべき人に銃口を向けるということの意味も知らずに・・・。
ミルが一步こちらへと歩み寄った。

「くるなああっ！！」
叫び声と同時に引き金を引く、銃声はやたら軽く、パンという音を立てただけだった。
その反動で後ろにのけぞり、数歩下がったところで足場がなくなる。
朝日が反射して、赤い真珠のような液体がキラキラと輝いているのだけが見えた。
俺は銃口の前で、空が遠くなっていくのを見つめていた。
なぜこうなった？これが俺の人生の結末なのか？

俺はカーテンコールもないままに幕が降りてくるのを感じていた。
あの施設から逃げ出して、タチリが怪我をしていることに気がついて、ミルという花に出会った。

。そこで一緒に働いて、タチリとミルが話しているのが聞こえて、ミルの母が死んだ。
それをきっかけにタチリと別れて、狂ってしまったミルに追われて・・・・・・・・・・
自由。未来。希望。夢。
あるはずだったんじゃないのか？
一緒に築くはずだったんじゃないのか？
俺の求めていたものは一体何処に行ってしまったんだろう。
落下はきっと一瞬だった。
その一瞬に俺の感じたものは何の答えもない疑問だけだった。

水面か、岩石に衝突する前に闇が訪れた。

何も見えない本当の闇。

その奥に一点の光が見えた。

光は徐々に近づいてきて、それは目の前で扉になった。

俺は立っていた。扉の前に。

扉の上には看板がかかっている。

”K & T”

扉のガラス張りの部分から光があふれていた。

俺は扉を開ける。

光があふれ出し、辺りは一転して真っ白になった。

真っ白な光の中にひとつの影が見えた。

扉が閉まり、扉についていたらしいベルの音が耳に静かに届いた。

店のカウンター越しにいた人がこちらに笑顔に向けた。

「いらっしゃいませ。」

その声には聞き覚えがあった。光がまぶしすぎて顔がはっきりと見えない。

「遅かったんじゃないか。待ってたんだぞ、キヒト。おかえり。」

光の中で鮮明な笑顔が見えた。

夕チリ！！